さくなると考えられた。外側方向と前後方向への加速度には一定の傾向は得られず今後の課題と考えられた。

P2-34.

当科における美容を中心としたレーザー治療

（社会人大学院 1 年形成外科学）
○坂本奈津紀
（形成外科学）
井田夕紀子、松村　一、渡辺　克益

レーザー治療が確立されたのは 1960 年代であり、日本に導入されたのは 1980 年代と言われている。当科においては 1998 年に最初のレーザー治療機器（Q スイッチアレキサンドライトレーザー／色素レーザー）が導入されてから、現在 3 台の異なるレーザー（Q スイッチアレキサンドライトレーザー／アレキサンドライトレーザー／パルス色素レーザー）を有し、日々の治療を行っている。

近年皮膚のレーザー治療としては、従来の血管腫や母斑・色素斑はもちろん、酒さ・ニキビ痕・脱毛や Skin Rejuvenation（肌の引き締め／しわとり）など美容の分野においても使用する機会が増加している。

当科においても美容に使用されるレーザーの波長は、YAG レーザーの波長をのぞいてすべてカバーしており、様々なニーズに対応できる。

今回はレーザーの基本的な仕組みの紹介と、当科において行われている美容を中心としたレーザー治療について報告する。

P2-35.

当院における大腿骨頚部骨折地域連携パスの運用状況

（リハビリテーションセンター）
○関　里絵、西野　誠一、石山　昌弘
鈴木美土里、高橋　亮吾、上野　竜一

【はじめに】 当院では平成 20 年 7 月より大腿骨頚部骨折地域連携パス（以下、連携パス）の運用を開始し 3 年が経過したが、実際の連携パス使用率は低く留まっている。そこで、当院の連携パスにおける問題点と今後の課題について調査し検討した。

【対象・方法】 対象は平成 20 年 7 月～平成 23 年 6 月の大腿骨頚部骨折を中心とした大腿骨近位部骨折患者 86 名。方法は対象者を連携パス使用群、非使用群に分け、性別、年齢、当院在院日数、転帰（パス使用群は最終転帰）を調査した。また、全対象のうち在院日数が 8 週間以上の長期に亘った患者についてその要因を調査した。

【結果】 患者の内訳は女性 65 名・平均 80.9 歳、男性 21 名・平均 68.9 歳。連携パスは当院を計画管理病院とする急性期 1 病院、連携回復期 2 病院の計 3 病院で運用し、パス使用群は 7 名、非使用群は 79 名であった。平均在院日数は、パス使用群 39.9 日、非使用群 44.3 日、そのうち自宅退院者 41.4 日、転院者 51.2 日、転所者 36.0 日であった。パス使用群の最終転帰は自宅 5 名、転院 1 名、死亡 1 名であった。非使用群の転帰は、自宅 56 名、転院 20 名、転所 2 名、死亡 1 名であった。在院日数長期患者はパス非使用群中 15 名、術後脱臼や多発骨折、癌の合併、院内転倒等が影響していた。

【考察】 当院は当該手術件数が少ないこと、三次救急を有する都市型大学病院という性質上重症患者が多いこと、連携病院の地理的条件等から連携パスが運用されにくいこと、また、首都圏医療の特徴として計画管理病院となる病院が多いこと等連携パスの運用を滞らせる要因が多重である。治療成績では、パス使用群・非使用群ともに最終転帰として自宅退院者が多かったが、使用群患者数が少なく、単純な比較はできないと考えた。平均在院日数はパス使用群、非使用群転院者ともに急性期病院での在院日数短縮を達成できておらず今後の課題となる。

P2-36.

頭頚部腫瘍摘出術に伴う頚部リンパ節郭清後のリハビリテーション開始時期の検討－肩関節可動域を中心に－

（リハビリテーションセンター）
○青山　瑠美、上野　竜一、太田とし江
松丸　聖太、西野　誠一

【はじめに】 頭頚部腫瘍摘出術に伴う頚部リンパ節郭清手術後の一症状として、頚部・肩甲帯の疼痛や肩の ROM 制限を有す症例に遭遇する。しかし、そ